

学校教育目標		「社会を生き抜く自立した児童・生徒」の育成			総合評価		
運営方針		「やりぬく姿はかっこいい！-GRIT-」を大切にする教育の実践 GRIT…Gutsやる気、Resilienceあきらめない心、Initiative自分から、Tenacity最後まで			2		
令和4年度の成果と課題		本年度の重点目標	具体的目標				
【成果】 ・あいさつ運動はセンター委員や6年生の児童により目標を上回る週4回実施、また、生活アンケートでは80%以上の児童があいさつをしていると答えている。 ・外遊びをする児童が目標の60%以上あり、また、シャトルランの記録は県の平均を上回った。 ・教職員全員で、気になる児童の情報共有を会議やQ-Uの研修等で行い、指導に活かすことができた。 【課題】 ・宿題をきちんと提出するなど、学びに向かう力が弱い。 ・子どもの就寝時刻が遅かったり、ゲームやインターネットの利用時間が長かったり生活習慣に課題がある。 ・小中一貫教育では、現状の部会の回数・方法では、人と人との交流をより深めるまでに至らなかった。	◎確かな学力【基礎的学力の習得】 ・読解力の育成	○読解力Stageの実践	○1人1台端末の更なる活用	○学びに向かう力の育成			
	◎豊かな心【人間関係形成・社会形成能力の育成】 ・安心して教育活動に取り組めるなまづくり	○安心できる集団づくりの実施	○障がいや特性に対する適切な支援の計画・実行・引継ぎ	○『あいさつの励行・ルール遵守』の徹底			
	◎健やかな体・安全【体力の向上と健康意識の醸成】 ・体力の向上 ・基本的な生活習慣の定着	○外遊びの推奨	○早寝、早起き、朝ご飯等の定着				
	◎家庭・地域との連携 ・家庭、地域と連携した教育力の向上	○ネットとゲームのルールづくりと実践	○学校運営協議会との連携				
	◎小中一貫教育の推進 ・小中9年間を見通した教育の推進	○9年間の共通のきまりづくり	○五條西部学園SCHOOL GUIDEの改訂				
	◎働き方改革	○人と人とのつながりを深める	○業務の充実				
			○業務時間の減少				
	評価項目	具体的目標(評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等
	確かな学力	○読解力Stageの実践	・読解力Stageを指標とする児童評価を1学期と3学期に行い、80%以上の児童が深化することを旨とする。 ・読解力Stageに基づく児童の自己評価指標を作成し、全ての児童が自分の力を意識できるようにする。	3	・Stageによる評価は1学期(6月頃)に行っており、3学期は2月下旬(学習のまとめの時期)を予定。12月実施の東京書籍学力調査では、5・6年生が前学年時より結果が向上しており、評価において80%以上の児童の深化が見込まれる。 ・読解力Stageに基づく児童の自己評価を2月下旬にGoogleフォームで行う。児童自身にふりかえりを行わせることで、自分の力を見つめ直す。	・ICTに関しては、基礎的な素地ができていたため、次は国語・算数を中心に授業でのICT活用を進めていく。学年ごとに授業でICTを活用したことを簡単にまとめて取組を積み重ねていく。 ・来年度も家庭学習の充実のために、保護者への啓発をしていく。 ・自主的にマキスタに取り組める児童を増やすため、通信を出し、イベントを企画していく。 ・教員間で、家庭学習の方法を共有し、理解を図る。	・総体的によい ・読解力を身につけることが大切 ・端末の活用により、AI、ICTを利用することができ、また苦手意識もなくなり、良いと思う。 ・放課後、宿題をする児童を見ていてもタブレットを使いこなし、意欲的に学習しているように見受けられる。 ・ICT活用が基礎学力の向上につながれば良いと思う。 ・電子図書館やe-Libraryの活用について、競い合える何か良いアイデアがあれば、もっと利用人数が増えるのではないかと、興味をもちたいと思うので、興味をもたせる工夫が必要。 ・家庭での取組も大事だと思う。くり返し声かけをお願いしたい。
		○1人1台端末の更なる活用	・セレクトタイムでのAIドリルの週2回以上の使用率を100%にする。また、教員の課題配信やテストの指定などを月2〜3回以上行う。 ・3年生以上の児童で、読書活動や調べ学習において、e-Libraryや五條市電子図書館を利用した並行読書などでの活用を60%以上にする。	2	3	・セレクトで週2回以上100%にするには達成できなかったが、83%とほとんどの学年では行うことができていた。 ・電子図書館やE-libraryの活用は目標は60%だが、結果として50%だった。図書室の本を利用することや電子図書館などに単元に合う本がない場合もあるが、教師が事前に調べて使えるものをピックアップするなどしていく必要がある。	
○学びに向かう力の育成		・宿題をしている児童が90%いる。 ・マキスタ(自主学習)をしている児童が70%いる。 ・各学年の家庭学習時間のめやすをこなしている児童が60%いる。	3	3	・宿題をしている児童が95%になり、目標を上回った。 ・マキスタをしている児童は3〜6年生で68%になり、目標を少し上回った。 ・家庭学習時間は、1・2年、30分以上88%、3〜6年、30分以上30%、60分以上62%になり、目標を上回った。ほとんどの学年で、1学期より3学期の方が家庭学習時間が長くなった。		
豊かな心	○安心できる集団づくりの実施	・年2回Q-Uの分析結果等を用いて実態を把握する。 ・全職員による児童理解、情報共有の時間を会議等で月2回以上実施する。 ・「集団づくりエクササイズ」を毎月行い、よりよい集団づくりに繋げる。	3	3	・児童の情報やQ-Uの分析結果を職員全体で共有し、児童や学級の実態把握ができた。また、今後の対応にも繋ぐことができた。 ・毎月の「集団づくりエクササイズ」が自他を知るきっかけとなり、よりよい集団づくりの一助を担うことができた。	・今後も児童の情報やQ-Uの分析結果の共有を図る。 ・「集団づくりエクササイズ」の様子を通信やブログ等に掲載し、保護者や地域の方にも周知していきたい。	・あいさつは基本である。自らできるよ う今後も進めてほしい。 ・あいさつは100%を目指してほしい。基本ができていないと次のステップに進めない。家庭でもあいさつから始める。 ・学校に伺う機会が多いので、よく子どもたちとすれ違いますが、5・6年生の児童ははっきりとあいさつをしてくれる印象がある。とても気持ちよく感じる。
	○障がいや特性に対する適切な支援の計画・実行・引継ぎ	・「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を基に引き継ぎ、職員間で共有する。 ・通常学級で在籍の気になる児童にも「個別の指導計画」を作成し、指導内容を明確化する。	3	3	・「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を用いて、必要があればどの職員も支援を行えるようにしたことで、教師間の共有が行えるようになった。 ・通常学級で在籍の気になる児童の「個別の指導計画」を作成することができた。	・素直な挨拶をする児童の様子を紹介したり、持ち物管理の工夫を伝えたりするなど、児童の言葉でも伝えられる機会を設けたい。さらに、保護者への協力も継続して啓発していきたい。	
	○『あいさつの励行・ルール遵守』の徹底	・あいさつ運動を週2回以上実施。 ・自分から挨拶をしている児童が80%いる。 ・自分の持ち物に記名をし、持ち物管理(忘れ物をしない・落とし物をしない)ができる児童が70%いる。	3	3	・委員会や6年生を中心に週2回以上の挨拶運動を行うことができた。「自分から挨拶をしている」と答えた児童が82%いるが、「相手に聞こえる声で、目を見て」などレベルアップした挨拶の姿勢を目指す。 ・持ち物管理は、77%と答えているが、記名のない落とし物が多かったり、忘れ物しても平気だったりするなど、まだまだ課題は残る。		
健やかな体・安全	○外遊びの推奨	・外遊びチャレンジを行い、学級の70%以上の参加率を目指す。 ・シャトルランの記録更新を図る。	2	2	・外遊びチャレンジには意欲的に参加した児童は多かったように感じたが、児童アンケートでは約50%程度であった。 ・シャトルランは体力テストにおいて県平均を大きく超えているため、成果は出ている。	・外遊びチャレンジに参加しやすい種目を考え、実施する。また各学級で参加するよう前向きな声かけを行う。 ・シャトルランについては今後も続けていく。	・以前に比べて外で遊ぶ子どもは減ったように感じる。天気の良いときに外で元気に遊ぶ子どもが増えたらよいと思う。 ・近年、外に出て遊ぶ子どもが少なくなってきた。家でゲーム機で遊ぶ子どもが多くなるべく外で活動できる子どもを増やしてほしい。 ・成長期の子どもにとって食は大変。朝の時間が無く、朝食を抜いている子どももいるかもしれない。朝食は必ず食べるよう、早寝早起きを推進してほしい。
	○早寝、早起き、朝ご飯等の定着	・学期に1度生活チェックを行い、それをもとに保健だよりや保健指導で生活習慣の改善を促す。 ・朝ご飯の摂取率90%以上を目指す。	2	2	・学期に1度の生活チェックを行い、委員会活動で結果をまとめて報告したり、生活習慣の改善にも取り組むことができた。 ・3学期の生活チェックの結果では、朝ご飯を毎日食べていた児童は89.1%であった。		
家庭・地域との連携	○ネットとゲームのルールづくりと実践	・ネットやゲームの使い方の話を聴く機会を通して、ネットの危険性や身体への影響などを知り、家でのルールや使用時間を守る。 ・家でのルールや使用時間などを守っている児童が70%いる。	3	3	・3〜6年生のネットスマホ教室を開催し、ネットの危険性や身体への影響についての話を聞き、普段の使い方を見直す機会となった。 ・家でスマートフォンやゲームなどを使用するときの約束を守っている回答した児童が95%いるが、長時間使用する等、折を見て指導をする必要がある。 ・地域の団体・人材を活かす教育活動は殆どの学年が実施できた。学校運営協議会は、年3回開催し、地域ボランティアを募集した。運営協議会の方針をもとに、ボランティアや地域の人材等のお力を借り、読み聞かせやまきの学習教室、絵画教室、交通立哨、昔遊び学習会等を実施した。	・来年度もネットの危険性などについて考える機会を設けるとともに、普段の使い方がどう見直すきっかけ作りをしたい。また、学級懇談等の機会を通じて、保護者への啓発を継続したい。	
	○学校運営協議会との連携	・教育活動に地域の関連団体・人材を活かす。 ・年に1回各学年で地域の関連団体・人材を活かす活動を取り入れる。 ・五條西部学園として学校運営協議会を開催する。 ・運営協議会の方針を受けて地域ボランティアにつなぐ教育を行う。	3	3			
小中一貫教育の推進	○9年間の共通のきまりづくり	・小学校、中学校での学習規律(話の聴き方・座り方・持ち物など)を統一する。 ・地域の公共機関の使い方やゴミの処理などの徹底を図る。	2	2	・小学校、中学校の学習規律やきまりについては、次年度に検討する予定である。 ・ゴミの処理については、家庭から各自ゴミ袋を持参する児童が増えるなど、随分よくなったように感じるが、公共機関の使い方や自転車の止め方については継続した指導が必要である。	・校種の異なる小学校・中学校が互いのことを知り、接続がスムーズになる共通理解を図ってほしい。	・これから小中連携し、統一性のある学習指導を進めてほしい。 ・中1ギャップの実情はどうなのか。 ・小学生の時に勉強するくせをつけないと難しいかもしれない。
	○五條西部学園SCHOOL GUIDEの改訂	・「確かな学力」「豊かな心」「健やかなからだ・安全」の3本柱について、これまでの取組を検証し、継続する取組と変えていく取組を整理する。 ・新しいリーフレットを作成する。	3	2	年間4回の小中一貫の部会を開催し、内容や方向性をワーキングチームで調整しながら、取組について検証、整理を行った。その内容を新しいリーフレットに反映し2月に印刷を行った。今後地域等に配布予定である。	・公共機関の使い方やゴミの処理等については、これまで以上に、巡視等で積極的な声かけや指導をするなど、放課後の様子を見に行くようにする。	
	○人と人とのつながりを深める	・小中一貫教育推進組織の部会を充実させる。 ・年に1回小中合同のレクリエーション会を開催する。	2	2	8月に小中合同レクリエーション会を実施、教員の交流を図った。それにより、小中一貫の部会やその他の行事等での話が少しスムーズに行われるようになった。部会での話し合いはそれぞれの立場の違いはあるがお互いを理解しようとした。		
働き方改革	○業務の充実	・行事の精選や業務の工夫について職員間で話し合う機会を学期に1回もち、業務の改善につなげる。	3	3	行事等のねらいを考えた上での精選や業務の工夫についての話し合いを学期に1回もち、業務の改善に努めた。しかし、仕事量の減少や共通理解の在り方について今後も工夫が必要である。	・残業をしてしまう原因として、急な生徒指導やアンケート・各部の会議等様々であるが、効率的に出来るよう計画段階の部分で十分考えられるようにしたい。	・業務が効率的に行えるよう、計画・工夫し、改善していく必要がある。 ・月最高何時間残業なのか。業務内容の分析が必要である。
	○業務時間の減少	・月45時間以上の時間外労働をしている教職員の数を30%以下にする。金曜日をノー残業デーとし、6時退勤90%を達成率とする。	2	2	月45時間以上の時間外労働をしている教職員の割合は30%以下になった。しかし、金曜日のノー残業の達成率は90%にはなっていない。残業をしてしまう原因について今後も検討が必要である。		
今年度の成果と次年度への課題		【成果】 ・宿題を忘れずしたり、マキスタ(自主学習)をしたりする児童が増えた。 ・学期に1度の生活チェックを行い、委員会活動で結果をまとめて報告したり、生活習慣の改善にむけて取り組むことができた。 ・3〜6年生のネットスマホ教室を開催し、ネットの危険性や身体への影響についての話を聞き、普段の使い方を見直す機会となった。 ・小中合同レクリエーション会を実施し教員の交流を図ることができた。			【課題】 ・マキスタ(自主学習)に取り組む児童が増えたが、学びに向かう力をつけるため引き続き取り組む必要がある。 ・朝ご飯の摂取率は90%を切っている。基本的な生活を送るために重要なことなので100%に近づけられるよう児童や家庭に働きかけたい。 ・小中一貫教育を推進するために、小中間でさらに人と人との交流を深めていきたい。		